

『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』

The souls by nature pitched too high,
By suffering plunged too low——

岩田 一男

(一) 『虞美人草』の構想

私は、このエッセーで、夏目漱石の『虞美人草』と、W. M. Thackeray の “The History of Henry Esmond, Esq.” (1852) とを取り上げて、『虞美人草』の構想について少しばかり書いてみたいと思う。

『虞美人草』とサッカーなどというのと、とたんに、そりやメレディスのまちがいでしょう、などと、言われそうである。それほど、『虞美人草』といえは、George Meredith の影響を連想するのが、今日、きまりのようになっており、それも “The Egoist” (1879) と “Diana of the Crossways” (1885) の二作との関係が指摘されることに定着したようである。

それゆえ、ここにサッカーを持ち出すのは、屋上屋を架す、というか、横車を押す、というか、のきらいがあるかも知れない。けれども、少くとも構想という点では、これらメレディスの二作にくらべて、サッカーの『ヘンリー

『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』

「エズモンド」のほうだが、『虞美人草』の下敷きに使われた可能性がはるかに大きいといえるのではないかと、私はひそかに考えている。

それで、『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』との類似点を具体的に摘出して（このエッセーの（五）に当る）お目かけさえすれば、すっきりするようなものだが、論述の順序として、まず『虞美人草』と『エゴイスト』、『それから『虞美人草』と『ダイアナ』を、それぞれ比較してから、『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』へ進むことにする。

（二）『虞美人草』と『エゴイスト』

作家が、ある作品の構想を何から得たかということ、単なる典拠でなく、創作過程の問題として探る場合には、これを明らかにすることは難しい。

例えば、芥川龍之介の王朝物その他や、中島敦の『山月記』等は、典拠は明らかだし、有島武郎の『ドモ又の死』のように Mark Twain の作品からヒントを得たと、作者自身がことわっている場合もある。

しかし、これらのように、表面的に容易にたどれる場合でなく、作家の受けた影響という、外面には見えない所の、隠微な交渉を見極める段になると、困難になる。ひとつには、作家には自分の受けた影響を認めたがらないものが多いからでもある。『ドモ又の死』にしても、マーク・トゥウェインの作品とは言っているが、それが何であるかは

公表してないのである。(余談だが、それが Mark Twain の “Is he living, or is he dead?” だということをはじめて知ったのは、昭和三年に余り人目につかない雑誌『季流』第二号に載ったエッセーを読んだ時である。)しかし、漱石はメレディスの影響ということは、自分でも認めている。はっきり言及しているのは、(1)「メレディスの計」(国民新聞、明治四二年五月)と、(2)鈴木三重吉への手紙(明治四十年七月二十日)と、(3)『虞美人草』第十八章の三箇所である。

(1)メレディスは明治四二年五月一八日に死んだ。四〇年一〇月二九日の『虞美人草』完結後一年半である。当然、メレディスについての感想を問われた。メレディスの感化を受けたかとの問に対して、

「無論受けてゐる。今日まで読んだ本で感化を受けぬ本は殆んどない。然し感化を受けるのと其本を覚えるのとは別物である。例えば物を食つたり飲んだりするようなもので、食つたものの批評も出来ず、味を忘れて仕舞つても、其質実丈は骨の髄から身体へ廻つて、たしかに血肉となつて何時迄も存在してゐる」

と答えている。(この答から、漱石が感化を受けたことは認めながら、「メレディスを自分の創作においていかに応用したかは知らしていない」という、故久野真吉氏のような意見もある。)(漱石とメレディス)昭和三十一年六月「国文学」第六卷第七号)

(2)『虞美人草』の甲野さんの日記についての鈴木三重吉宛の手紙は、次のごとくである。

甲野さんの日記は毫も不自然ならず。甲野さんの日記は京都の宿屋の所に出てゐる。つまり其つゞきである。しかしてかゝる哲学者のかいた日記をポツポツ引き合ニ出スノハアル意味に於て甲野サンヲ貫ヌカシムル方

便デアル。実ハ此ヤリ口ハ僕ノ創作デハナイ。英のメレデスの作に屢しばしば此手ガアル。僕ハ之ヲ踏襲シタト評サレテモ仕方ガナイ。

ここでははっきりメレデイスの影響を述べているだけでなく、メレデイスの手法を創作にどのように応用したかまで述べている。だから久野説はくずれぬ。

(3)はほかならぬ『虞美人草』そのものの中で、メレデイスの影響を述べている箇所は次の通りである。

メレデスの小説にこんな話がある。——ある男とある女が諜しめし合せて、停車場ステーションで落合ふ手筈をする。手筈が順に行つて、汽笛がひゅうと鳴れば二人の名替はそれぎりになる。二人の運命がいざと云ふ間際迄せま逼つた時女は遂に停車場へ来なかつた。男は待ち毫ほげの顔を箱馬車の中に入れて、空しく家へ帰つて来た。あとで聞く和朋友たれかれの誰彼が、女を抑留よくりうして、わざと約束の期を誤あやまらしたのだと言ふ。——藤尾と約束をした小野さんは、斯んな風に約束を破る事が出来たら、却かえつて仕合しあはせかも知れぬと思ひつゝ烟草たばこの烟を眺めて居る。

以上、三つの例の示すように、メレデイスとはっきり書かれていたため、当然、『虞美人草』というメレデイス、メレデイスという『エゴイスト』思をい浮べられる。(ついで『ダイアナ』も指摘されてくる)ほど有名になつてしまつた。すでに、幾人もの人たちの論考もある。(久野真吉・板垣直子・井上百合子・森谷池俊治・石丸久氏等々等)

ところが、(1)は一般的な場合だから問題にしないとして、(2)、(3)のどちらにも、漱石が『エゴイスト』についてはっきり言及しているところはないのである。

(2)の甲野さんの日記が The Ordeal of Richard Feverel (1859) の中に用いられているリチャードの父 Austen の箴言集 The Pilgrim's Script の応用であることは明らかであるし、

(3)の、メレディスの小説中の男女が停車場で落ち合えなかった話というのは、『ダイアナ』の第二十六章「裏切られた恋人数々の教訓を受ける条」であることは、後に示すように明らかである。(『エゴイスト』の第二十七章にも「停車場にて」というのがあることはある。しかし『ダイアナ』の方がはるかに似ている。このことを最初に指摘したのは、前掲の久野氏であるらしい。)

なお、これらのほかに、『我輩は猫である』と『野分』にもメレディスその人への言及があるし、『草枕』には、『Beauchamp's Career』の一節が引かれている。『文学論』の諸所にもメレディスが引かれている。しかし、それらどれにも『エゴイスト』や『虞美人草』に直接に結びつくものはない。

それなのに『虞美人草』といえは『エゴイスト』(平田禿木らの訳では『我意の人』)となるのは、何よりも、多くの人たちの言うように、人間の「我」の追求というテーマのせいであろう。どちらも、主人公の主我的性格の失敗を人間心理の科学的追求という方法で捕えている点である。しかし『エゴイスト』の物語それ自体は、内容的にほとんど『虞美人草』とは近似性はない。

それでは、この辺で『エゴイスト』の内容を紹介すべきかとも思うけれども、あまりにも有名な作品なので、その梗概を語る必要もなさそうである。(ただ、私の問題とする構想という点から、いささか簡単に触れることにするが)。

五〇章に分れたこの長篇は、要するに、主人公 Sir Willoughby Patterne の求婚失敗譚である。彼は富裕で男振りもよく、典型的な紳士でもあるが、主我的で *humility* and a *sense of humour* を欠いている。最初は富裕な *Constantia Durham* と婚約するが、彼の本性を見抜いて女の方で逃げ出してしまふ。一方、彼と幼馴染で、貧しいが美しい *Laetitia Dale* は彼を敬愛しているが、彼は本気になれない。ついで、才色兼備の佳人 *Clara Middleton* を見出し、彼女の父が美食家なので、上等の葡萄酒で親子ぐるみ一ヶ月も接待して、うまく引き付けて婚約するが、彼女も彼の性質を知って愛想をつかし、従兄の *Vernon* と結婚してしまふ。*Willoughby* は、今では彼に幻滅している *Laetitia* を妻にと口説いて、漸くモノにするという気の進まぬ結婚で終る。

この構想(筋)の進め方は、主人公の *Willoughby* に、小野さんの面影を見出すことが出来るような気がする以外は、『虞美人草』との類似性は *seign* なものといわねばならぬだろう。

さて、『エゴイスト』の主人公は主我的な男性であり、『虞美人草』の女主人公藤尾も「私の女」として描かれており、どちらも性格の心理的科学的追求の方法に共通のものがあるのだが、その摘出の仕方はかなり異っている。メレディスは求婚失敗譚を通して主我的精神に対する喜劇的批評を加えているが、漱石は峻烈にも藤尾を殺してしまうことによって、儒教的倫理性を芸術性の優位に立たせた観があり、ここに彼の「士大夫意識」を指摘する人もあるくらいである。

漱石がこうした結末をとった点は、更にシェークスピアの要素が加っていると考えられ、ほぼ、定説化している。『虞美人草』の小野さんが藤尾に言う「暴風雨の恋、曆にも録つづて居ない大暴雨の恋。九寸五分の恋です」との言葉は、シェークスピアの悲劇『アントニーとクレオパトラ』のエノバールバスの言葉によると森谷佐三郎氏の論考にある。漱石はシェークスピアの劇を意識しすぎたために『虞美人草』に劇的結末を与えたのだらうと見做され、藤尾と小野さんの「我」の摘出にもっと焦点をおいて書き、シェークスピア式の藤尾の死は避けた方がよかつたとも批評されている。

この点、『虞美人草』に対する『エゴイスト』の影響は、構想ではなく、文学論である。Comic Spirit という概念を提示する、有名な「喜劇論」の「喜劇は社交生活を批判する遊びであって……」に始まる文芸観である。これの『虞美人草』への影響を考える方が、重要であろう。

また、例えば Comic Spirit の現われとめいづべき Mrs. Mountstuart Jenkinson が Clara を “a rogue in porcelain” と批評しているが、そのような警句や比喻がふんだんに出ているところは、『虞美人草』の場合に、ほとんどすべての人物が随所に洒落や警句をふりまくのと近似している。

しかし、これらは、いずれも、構想の問題とは程遠い。

(三) 『虞美人草』と『ダイアナ』

『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』

次に、『虞美人草』と『ダイアナ』の問題に移る。この問題は、さきほど『虞美人草』の第十八章に、漱石自身が「メレヂスの小説にこんな話がある。——」として言及している所であり、この箇所を『ダイアナ』と結論した久野氏の意見は定説化していて、松浦嘉一氏は「漱石は『虞美人草』の執筆中暑さと病氣とに悩まされて、早く女主人公を殺して一挙に小説を終らしめたいと焦った際に、メレヂスのこの解決手法を借りていると私に知らせてくれたのも久野君である」と言っている（『英語青年』一九六六年七月号「英国の詩人・小説家」）。

しかし、ここで私のいささか疑問とするのは、その点である。漱石の胸裡に『ダイアナ』のこの場面があったことは確実であるとして、十八章において、わざわざ「小野さんは、斯んな風に約束を破る事が出来たら、却つて仕合かも知れぬと思ひつゝ、烟草の烟を眺めて居る。」と書いている漱石が、それではお誂え通りになりましたと、「この解決手法を借りている」というのでは、あまりに芸が無さすぎる話ではあるまいか。もっとも、漱石自身が、自分は芸が無いから、さあこの通り借りたんだぞ、と開き直ったのだとするほどに穿った見方は、私は採りたくない。やはり、この箇所は一応伏線のように出しておいて、それがどうひねられて行くかという手捌きの程をどうか御覧下さい。というのではなかつただろうか。いくら漱石がその書簡の中で、

本日虞美人草休業。肝癩が起ると、妻君と下女の頭を正宗の名刀でスバリと斬つてやり度い。然し僕が切腹

をしなければならぬからまづ我慢する。さうすると胃がわるくなつて便秘して不愉快でたまらない。（鈴

木三重吉へ 明治四〇年六月二日）

とか、

虞美人草はいやになった。早く女を殺して仕舞たい。熱くてうるさくつて馬鹿氣てゐる。是インスピレーシ

ヨンの言なり。(高浜虚子へ 明治四〇年七月十六日)

と言っているとしても、実際の脱稿には八月末までの余裕があり、明治四〇年六月二三日から一〇月二九日まで一二七回にわたって東西の朝日新聞に連載されたことを考えると、そんなに一挙に解決しようと焦って、他人の手法を「借りている」のだと考えるのは、正直すぎる結論ではないだろうか。

それに、『ダイアナ』の駆け落ち失敗の場面設定が『虞美人草』とは非常に異なっているのである。漱石が「朋友の誰彼が、女を抑留して、わざと約束の期を誤あやまらしたのだと云ふ」というのは彼の思いちがいであつて、なるほど『虞美人草』では宗近が小野さんに膝詰談判をして駆け落ちを食いとめるのだが、『ダイアナ』の場合は全然そのようなことはないのである。

(四) 『ダイアナ』の梗概

参考までに、メレディスの『ダイアナ』の梗概をここに述べることにしよう。やや詳細に書く。というのは、この本がメレディスの傑作の一つといわれているわりに、日本ではあまり読まれていないようであるからである。(身近かなところで、一橋大学図書館の『ダイアナ』を開けてみたら、昭和三一年六月二〇日購入以来十年以上も *unchit* であつた。各大学の紀要や卒論にこの小説が採り上げられた例は、よしあつても、極めて稀であろう。なお、もう一

『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』

つ余計なことだが。the Crossways を「白十路」のように訳す人があるが、どうであらうか。これは領地の名である。読んでいないような印象を与える。)

この作品の女主人公ダイアナは、これも才色兼備の(メレディスは、よくよく才色兼備の女が好きらしい)いさゝか嬌慢でさえもあるアイルランド生れの女性である。Sheridan の孫にあたる Mrs. Caroline Norton をモデルにしたといわれる。彼女は両親の死後、領地 the Crossways を Warwick 家に貸して、親友 Emma Dunstan の家に寄寓する。ところが Emma の夫 Sir Dunstan に言ひよられたことから the Crossways に逃避し、格別愛してもいない Warwick と結婚してしまふ。この結婚は当然不幸になり、失意の Diana はロンドンで別居生活を送る。Lord Dannisburgh の夫は二人の仲を疑い訴訟を起すが、証拠不十分となり、Diana はロンドンで別居生活を送る。Lord Dannisburgh の急逝により、彼女はその甥の若い政治家 Percy Dacier と接近する。Diana は、はじめて恋を知るが、夫 Warwick は病氣となり Diana を呼び戻そうとする。Diana と Dacier は駆落ちをしようとするが、駅で待ち合せる時間に Diana は来ない。Emma が突然危篤になり Thomas Redworth がその手術に立合わせるために親友 Diana をつれていってしまったのである。Dacier は待ちぼうけとなり、二人の恋には冷却期間がくる。その上に Dacier の政治上の秘密を Diana が、それと知らずに新聞に洩らしたために、二人の仲は遂に決裂し、Dacier は富裕な Constance Asper と結婚してしまふ。傷心の Diana は夫 Warwick の死後、金持だが平凡な実業家 Thomas Redworth と結婚するが、彼こそは、実は最初から忠実に彼女を愛していた男であったのだ。

この小説は或る意味では、『ヘュイスト』の二番煎じともいふべきものであらうか。主人公を Willoughby (男) から Diana (女) に変え、あわせて才色兼備の女性 Clara を投影したものとすれば、忠実な Redworth には Laetitia の面影がある。どちらにしても共通するのは嬌慢な主人公のエゴが平凡な生活の現実の前に崩れ去る anticlimax である。

それにしてはなまきほどの駆落ち失敗の場面においては、Redworth が、何も知らず (unknowingly) に Emma Dunstan 危篤の報せをもつて Diana を呼びに来るのである。結果として恋にはひびが入ってしまう。Dacier が彼女の不美を怒り、

And I was ready to fling down everything for the woman!

と叫ぶ、

He and she, so close to union, were divided. A hand resembling the palpable interposition of Fate had swept them asunder.

このようにして駆落ち失敗のあと、心におこった変化をよそにして、この二人は世間には何も知られずに、表面上は今までもおり交際を続け得るのであって、藤尾のように、駆落ち破たんそのままカタストロフィへと墜落してゆくのではない。むしろこのあとに、Dacier の政治上の秘密を Diana が漏洩した裏切り行為によって完全な破局が来るのである。

作品としてはこの Diana と Dacler の後日譚はなくもがなの感じがする。(事実、この小説は、最初は、駆落ち失敗の第二十六章で終っていたのである。) またこうした興ざめの後日物語を描くのは至難というべきである。そこにあえていともうとする作者の努力は買うが、やはり十分な効果を示していない。Diana が最後に Redworth と結ばれるあたりは冗長、かつ、ぎこちなくて、必然性に乏しく、読者をあきあきさせる。まさに anticlimax である。Diana は Redworth を友人としてその価値を認めてはいるが、決して愛してはいない。それどころか、彼の実利的手腕を嘲笑してやうする。Redworth は 'Money is of course a rough test of virtue. We have no other general test. とう人間であり、' confident in his ability to do everything of the practical kind. である。彼は Diana がその不動産 the Crossways を売ろうとする時、他人の名でこれを買ひ、彼女が手放した家具も全部手に入れて the Crossways にそなえつける。他日彼女を喜ばせようとする彼のこの好意を Diana が皮肉に解釈するあたりは人間の whim というものがよく出てくる。

A suspicion that this man, when infatuated, was able to practise the absurdest benevolence, stirred very naughty depths of the woman in Diana. 彼女は 'I like him: that I can say. He is everything I am not. But now I am free, the sense of being undeservedly overesteemed imposes fetters, and I don't like them.'

とはっきり言うが、この辺は、『虞美人草』の藤尾が宗近を嫌うのとは、だから、根本的に性格を異にしている。藤尾は宗近が銀時計ももらわず、外交官試験にも落第したから、浅薄にも「あんな趣味のない人」と嫌うのである。だ

が Diana が Redworth を愛し得ない心情は、むしろわれわれの共感をさえさそう。(それだけに最後に彼女が唐突に豹変して Redworth と結婚するに当り「I wanted a hero, and the jewelled garb and the feather did not suit him.」と弁解がましく言い、Redworth が金持の実業家だったからいまままで敬遠したのだ、と自分を正当化するのは、構想としては全く不自然である。)

また漱石は、藤尾を「好かない女」として描いているが、メレデイスは『エゴイスト』や『ダイアナ』において、終始、女性の味方である。『エゴイスト』の Sir Willoughby を「己れを省みることなく、女性の純潔、美貌、貞淑さを要求しながら、その権利を認めない、功利的なヴィクトリア朝の男性として描き、例の ordeal に遭遇させるのである。ところが、Diana は才色兼備であって男性は勿論女性にも(唯一人の Mrs Wathin を例外として)好かれる人物にされている。彼女を恋して三〇才すぎまで独身なのは Redworth 以外にも Sullivan Smith などがいる。Emma Dunstan も姉のような友情で彼女を包んでいる。

(五) 『ヘンリー・エズモンド』について

以上冗長かつ脱線になってしまったが、要するに、漱石は、『虞美人草』の解決に当って、『ダイアナ』の手法をそのまま借りたのではない。ひねっている。それで、どうひねったか、そのひねり方について、考えてみると、実は『虞美人草』のこの結末がサッカレーの『ヘンリー・エズモンド』に酷似しているのだが……と前置きをしておいて、

さていよいよ本題の『ヘンリー・エズモンド』と『虞美人草』の構想との関係にとりかかるところにしよう。

一八五二年出版のこの長編歴史小説は、サッカーの作品中でも出色のものであるといわれるが、これも『ダイアナ』同様日本ではあまり読まれていないらしい。(もし広く読まれているなら、私よりさきに『虞美人草』との類似性に注目する人があってもよさそうだと思うのだが……)。

Castlewood 家の寄寓者 Henry Esmond は実は先代の正当嗣子であったが、当主の Castlewood 卿は臨終に當つてその秘密を彼に打明け、家督横領の罪を詫びる。Henry は夫人とその子 Frank のために自己の権利を犠牲にして軍隊に入る。のち彼は Frank の妹 Beatrix の美貌に魅せられて熱烈に求愛するが、Beatrix は受けつけない。Henry は Beatrix を得るために Pretender (James Stuart) を英国王位につけて自分は侯爵の地位を得ようと計画する。逆に Beatrix は Pretender と駆落つて、Henry の計画は画餅に帰する。Henry はついに Beatrix の母 Lady Castlewood と結婚し、新天地を求めて米国 Virginia 州へ渡る、という彼の自叙伝ともいふべき歴史小説である。(なお、The Virginians はこの続篇というわけであるが、『ヘンリー・エズモンド』はそれだけで独立した作品であり、この問題では続篇のことは考えに入れる必要はあるまい。)

こう書いてみると、この作品の主人公は、題名から考えると誠実で平凡な Esmond その人のようである。しかし、実際は、彼のアイドルである Beatrix ではなからうか。彼女の美貌については、少し先に、藤尾の描写と対照して示すが、サッカーが実に鮮やかに描いている。

さて、整理してみると、人物や道具立ての設定は次のようになっていて、『虞美人草』とは、かなり図式的に組み

合わせる事が出来るのに驚く。

虞美人草	Henry Esmond
藤尾	Beatrice
宗近	Colonel Henry Esmond
甲野 (藤尾の兄)	Frank, Lord Castlewood (Beatrice の弟)
糸子 (宗近の妹)	Lady Castlewood (Beatrice の母)
小野	Pretender (James Stuart)
藤尾の金時計	Esmond 家の diamonds
甲野の家督相続放棄	Esmond の継承権放棄

こんな風にして見てゆくと、宗近が藤尾を嫁に貰いたくて外交官試験に合格しようとする所も、Esmondが Beatrice の欲心を買おうとして侯爵の位を得ようと画策するあたりと似てはいないだろうかと考えられたりする。

次に『ヘンリー・エズモンド』の女主人公 Beatrice と、『虞美人草』の女主人公藤尾の描写を対比してみると興味がある。どちらも嬌慢な美貌の持主であるが、二人の作者はどのように描いているであろうか。まず Beatrice は——
 ...a wax candle in her hand, and illuminating her, came Mistress Beatrice—the light falling indeed

『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』

upon the scarlet ribbon which she wore, and upon the most brilliant white neck in the world.

Esmond had left a child and found a woman, grown beyond the common height; and arrived at such a dazzling completeness of beauty, that his eyes might well show surprise and delight at beholding her. In hers there was a brightness so lustrous and melting,……

She was a brown beauty: that is, her eyes, hair, and eyebrows and eyelashes were dark: her hair curling with rich undulations, and waving over her shoulders; but her complexion was as dazzling white as snow in sunshine: except her cheeks, which were a bright red, and her lips, which were of a still deeper crimson. Her mouth and chin, they said, were too large and full, and so they might be for a goddess in marble, but not for a woman whose eyes were fire, whose look was love, whose voice was the sweetest low song, whose shape was perfect symmetry, health, decision, activity, whose foot as it planted itself on the ground was firm but flexible, and whose motion, whether rapid or slow, was always perfect grace—agile as a nymph, lofty as a queen—now melting, now imperious, now sarcastic—there was no single movement of hers but was beautiful. (Book II Chapter VII)

漱石は、徳田秋声らの言っているやうに、元来、女を描くことは下手らしいが、藤尾の描写も、サッカーに比べて大変見劣りしている。『虞美人草』第二章冒頭にはただ美辞麗句を並べ立てるのみで、

紅を弥生に包む屋 酣なるに、春を抽んずる紫の濃き一点を、天地の眠れるなかに、鮮やかに滴たらし

むるが如き女である。夢の世を夢よりも艶に眺めしむる黒髪を、乱るゝなど疊める髪の上には、玉虫貝を研々と董に刻んで、細き金脚にはつしと打ち込んでゐる。静かなる昼の、遠き世に心を奪ひ去らんとするを、黒き眸のさと動けば、見る人は、あなやと我に帰る。半滴のひろがり、一瞬の短かきを偷んで、疾風の威を作すは、春に居て春を制する深き眼である。此瞳を遊つて、魔力の境を窮むるとき、桃源に骨を白うして再び塵寰に帰るを得ず。只の夢ではない。模糊たる夢の大いなるうちに、燦たる一点の妖星が、死ぬる迄我を見よと、紫色の、眉近く逼るのである。女は紫色の着物を着て居る。

藤尾のトーンは、その名のように、紫であり、Beatrix のそれは、はるかに強烈な fire である。しかし両者ともに、眼においては、共通の何かがあることが語られている点に注意したい。

また、この藤尾は父の形見の石榴石つきの金時計を、自分の夫と定むべき人に呉れてやるといふ。それはサッカーの作の Esmond 家伝来の diamonds (Henry が先代の Duchess から贈られた家宝) を置き換えたものと言えないだろうか。

……there were the famous diamonds which had been said to be worth fabulous sums……These diamonds, however, Colonel Esmond reserved, having a special use for them…… (Book III Chapter 1)

というわけで、求愛が成立すれば、結婚の贈り物にするつもりだったのである。

十年間の求愛は、しかし catastrophe に終る。Beatrix は言っているのである。

『眞美人草』と『ハンリー・エズモンド』

“...I like fattery and compliments, and you give me none; and I like to be made to laugh, sir, and who's to laugh at *your* dismal face, I should like to know? and I like a coach-and-six or a coach-and-eight; and I like diamonds, and a new gown every week; and people to say, 'That's the Duchess.

How well her Grace looks!'.....” (Book III Chapter IV)

そして藤尾もまた、宗近を「外交官の試験に落第したって、些も恥づかしがらないんですよ。普通のものなら、そこし奮発する訳ですがねえ」といふ。「……あんな趣味のない人」と「すばりと句を切った」のである。

いししつ Duchess はあまむじつと誇る Beatrix の野心になりまわれ、Esmond は、侯爵の位を手にしよしつ、Pretender を王位につける陰謀に加盟するのであるが、Beatrix の虚栄心は止まるといふを知らず、遂には英国王位を覗く James Stuart (Pretender) との駆落ちにまで発展する。ために Queen Anne の臨終の床に Pretender を会わせて王位を譲り受けようとする Great Scheme は失敗に終り、Lord Castlewood (Frank, Beatrix の弟) と Esmond とは馬を走らせて二人のあとを追いかける。この climax は『虞美人草』の最後の場面と酷似する部分である。

“That we arrived in time. No wrong hath been done, Frank,” says Colonel Esmond.

と未然に事件を防いだことを喜ぶ Esmond に対し Pretender は

“Malediction!” と叫び、tears starting into his eyes with helpless rage and mortification. “What will

you with me, gentlemen?"

と答へた。

"It's all your Majesty's own fault. The Queen's dead most likely by this time, and you might have been King if you hadn't come dangling after Trix."

と語らなむ。語らなむ。

"Thus to lose a crown,...to lose the loveliest woman in the world; to lose the loyalty of such hearts as yours, is not this, My Lords, enough of humiliation?—Marquis, if I go on my knees, will you pardon me?—No, I can't do that, but I can offer you reparation, that of honour, that of gentlemen.

Favour me by crossing the sword with mine....."

と諷刺せられた。その體を見たBeatriceは

The roses had shuddered out of her cheeks; her eyes were glaring; she looked quite old. She came up to Esmond and hissed out a word or two...

Esmond は返かへし。

"If I did not love you before, Cousin, think how I love you now."

と語らなむ。

... If words could stab, no doubt she would have killed Esmond, she looked at him as if she could.

と作者は書く。

このあたりは『虞美人草』第十八章の終りに、小野さんの交心を知った藤尾が、

「ホ、ハ、ハ」

歇私的里性の笑は窓外の雨を衝いて高く迸つた。同時に握る拳を厚板の奥に差し込む途端にぬらぬらと長い鎖を引き出した。深紅の尾は怪しき光を帯びて、右へ左へ揺く。

「ぢや、是はあなたには不用なんですね。よう御座んす。——宗近さん、あなたに上げませう。さあ」

白い手は腕をあらはに、すらりと延びた。時計は赭黒い宗近の掌に確と落ちた。宗近君は一步を熾焔に近く大股に開いた。やつと云ふ掛声と共に赭黒い拳が空に躍る。時計は大理石の角で砕けた。

「藤尾さん、僕は時計が欲しい為に、こんな酔興な邪魔をしたんぢやない。小野さん、僕は人の思をかけた女が欲しいからこんな悪戯をしたんぢやない。かう壊して仕舞へば僕らの精神は君等に分るだらう。是も第一義の活動の一部だ。なあ甲野さん」

「さうだ」

呆然として立つた藤尾の顔は急に筋肉が働かなくなつた。手が硬くなつた。足が硬くなつた。中心を失つた石像の様に椅子を蹴返して、床の上に倒れた。

藤尾の必死の反撃抵抗に対して、宗近は、こうして残酷な最後の一撃を加えたのであるが、Esmondも同様に、すでに Beatix への愛情は消え果てていた。

But keen words gave no wound to Mr. Esmond; his heart was too hard. As he looked at her he wondered that he could ever have loved her. His love of ten years was over; it fell down dead on the spot, at the Kensington tavern, where Frank brought him the note (Beatrix の Pretender に 駈落ちぎ促す手紙) out of *Elton Basithe*.

というあたりは、如何であらう。

だが、これから先きの両者の結末は、大分異っている。漱石は藤尾を殺してしまふが、サッカーは、
The Prince (= Pretender) blushed and bowed low, as she gazed at him, and quitted the chamber. I have never seen her from that day.

とする。

しかし實際は、逆にこの作の最初の Preface にあつて、まじとじ disillusioning な後日譚がつけ加えられていたのである。サッカーは Beatrix を、元 Castlewode 家のお抱え chaplain じやった足指の太い Tom Tusher と結婚せよ。

.....she had lost all her good looks;.....She grew exceedingly stout;.....No wonder she became a favourite (of King George the Second), for the King likes them old and ugly, as his father did before him.....

という実に興ざめな一節をつけ加えるのを忘れてはいない。ここに至ってわれわれは、漱石とサッカーの発想の取

扱い方法の相違をイヤという程見せつけられ、しかも残念ながら、漱石の方がはるかに拙劣なのではないかとさえ、考えさせられる。もっともこれは単に作者の技倆というよりは、東洋と西洋の人情の相違から来るのかも知れないが。

(六) Beatrix 及 Lady Castlewood 対 藤尾と糸子

Beatrix に失恋した Esmond は後に年上の女性 Beatrix の母 (Lady Castlewood) と結婚するのであるが、この女性 Beatrix とは極めて対照的に描かれている。二人の異なる性格の女性を対比するというこのやり方に『虞美人草』との類似性を考えてもよいだろう。漱石自身は雑誌「新潮」に『虞美人草』の意図について次の如く書いている。

(前略) 藤尾の性格は我儘に育つた私の強い所から来たのか、自意識の強いモダンな所から来たのかと云ふのですか。それは両方に跨つて居る。単に自意識の強いモダンな所を見せようと云ふそれを目的にして書いたなら、あゝは書かなかつたであらう。併し一面に於てはそれも含んで居る。従順な女と私の強い女を藤尾と糸公 (筆者注 宗近の妹のお糸で、後に甲野と結婚する) に依つて対照させ、そして、然うした性格の異なる二個の女性の運命を書いて見せたのかと云ふのかね。別に然んな考へはない。必ずしも自意識の強い女はあゝ云ふ風に終るもので、お糸のやうに順良な女はあゝ云う結果になると定つたものではない。従つて、あの作に異つた性格を有する二個の女性の運命が書いてあるからといつて、直ちにあの作に依つて世間全体の

あゝした性格の女性を説明し尽したと思はれては困る。兩者ともあゝ云ふ性格の女はあゝなると定つては居ない。唯、パティキュラー・ケースがあゝなると云ふ丈で、全体があゝ云ふ運命になると云ふことは含んで居ない。(明治四二年二月一日)

と、かなりくどいくらい弁解しているが、大体においてありきたりの善玉悪玉的なあまりにも通俗的な取り扱ひに終った観があることは何としても否定出来ないようである。これはシェークスピアの劇を意識したために善悪二群に類型化されすぎたのだという説もある。これに対して、サッカーは、“Vanity Fair”におつて Becky Sharp と Amelia との二人の女性をみごとに描き分けた経験に立って、Beatrix とその母 Lady Castlewood を、母娘という肉親のつながりから、兩者共通の大きな欠点 Jealousy に視点をすえて、リアルにつかんでいる上に、内面に矛盾する多くの性質があつて真実性が高い。漱石とは格段の差がある。(なお漱石が藤尾に「年を取ると嫉妬が増して来るものでせうか。」(傍点筆者)(第二章)といわせているのも面白い。)

(七) 『虞美人草』の書き方

漱石は明治四一年一〇月一日の「早稲田文学」に、『虞美人草』の書き方と題して、

エ? 『虞美人草』の書き方ですか。格別そんな事を考へたのでもないのです。複ゴムブリケイト雑ザツなラヴ、アッフエー
アズ其のものを描いたものとしては極く幼稚なものでせう。又ラヴ丈ダツを書いたものでもないのですからね。

『虞美人草』と『ヘンリー・エズモンド』

ぢや狙つたものは何かといふのですか、——さうですね。ラヴも書きちや居ますがね。ラヴ文を描く積りならもう少し遣り方もあつたでせう。つまりあれはね、ラヴといふものを唯一のインテレストとして貫ぬいたものぢやないから恋愛事件の発展として見ると中中不完全です。それなら何処が完全かと云はれると益々弱る訳だが、つまり二つか三つかのインテレストの關係が互に消長して、それが仕舞に一所に出逢つて爆發するといふ所を書いたのです。書いたのぢやない、書いた積りつづなのです。

この点は『エズモンド』も同様で、Henry の Beatrix に対する恋は sideplot であり、焦点はむしろ Pretender (James Stuart) を英国王位にすえようとの Jacobites の陰謀であり、それが Beatrix と Pretender の Irritation とからみあつて両方とも catastrophe に終り Esmond と Lady Castlewood の結びつきに至る結果になっている。それこそいくつかのインテレストのからみ合いといふことができよう。

(八) 結 び

漱石はその著『文学論』の第三章「fに伴なふ幻想」において、価値なき不快の人事の例に、『ヘンリー・エズモンド』の女主人公 Beatrix について述べ、これも嫌な女の部類だが、描写がすぐれているので救われている、という意味のことを述べている。漱石が Beatrix ないし『ヘンリー・エズモンド』について言及しているのは、これ以外にはないようである。それ以外に語っていないからといって、『ヘンリー・エズモンド』が『虞美人草』に關係が

ないと言いつ切るには、さきほど述べたように、その構想の類似性が少々強すぎるように思われてならない。それなら何故漱石が『エズモンド』に触れていないのであるか。この問題を考えることは至難である。大家の奏でる琴線には金玉の響きがあることを思わねばなるまい。しかし私はやはり漱石は手法や精神をメレディスから受けついでいるが、それを追うための筋の進め方は、サッカレーから借用しているという考えに立つものである。

漱石は『虞美人草』を書く以前に、メレディスを多読していたという。東北大学所蔵の漱石文庫の調査によれば、メレディスの沢山の小説は二つだけ除いて全部読破されているほどの愛読ぶりである。そのメレディスの手法は、George Eliot の “process of intellectualization” の手法に似ているといわれ、それはまた漱石に、地位上、性格上、アピールする所が多かったのであろう。また、世間では往々、漱石の『虞美人草』における華麗な美文が、メレディスの影響下に書かれたとしているが、たしかに『草枕』中に引かれる “Beacham's Career” の一節で漱石が「情なまけの風が女から吹く……」と訳しているあたりの美しさとか、例えば『ダイアナ』にある February blew South-West for the pairing of birds. などの甘美な、詩人としての抒情はメレディスの豊かな天分を物語るものであり、さきに私が引用した藤尾の描写などは決して優れたものとは言えないが、美文句調の特異さは、メレディスを学んだものかも知れない。しかし漱石は意識的にメレディスの Comic Spirit という知的要素を伝承する方に、より大きく傾むいたのである。

さて、intellectualism 癖が発揮された場合のメレディスの文章たるや、まことに驚くべき支離滅裂の悪文となるのである。「その辞句は乱雑で奇警、文体は難解晦渋であり、むやみと修辭的警句が多い」(斎藤勇)のは、漱石も同様

である。

もともと鋭敏な諷刺で世上幾多の矛盾や偽善をえぐり出すというメレデイスの作風であるが、『エゴイスト』の冒頭において「人間性を文明男女の客間に於て取扱ふ」というように、舞台は上流階級の客間である。その目は専ら上流知識階級の裏面にひそむ複雑な心理過程の現象に向けられて、大衆への親しみを忘れてしまった。世間に対する時には、説教癖となり、ディケンズなどのような世相への同情は見られるべくもない。メレデイスは本質的には大衆文学の作家ではなかつたのである。

そして漱石もまた、大学の教壇から講義でもするかの如く、『虞美人草』の「最後に哲学をつける、この哲学は一つのセオリーである、僕は此セオリーを説明するために全篇をかいてゐるのである。」(小宮豊隆への書簡、明治四〇年七月一九日)と言ひ、人生觀的文藝觀を追求するために全作品を賭けてしまつてゐるのである。そのために、彼は自己の「学殖を傾注して」(井上百合子) 作品を書いた。その結果、世評は概してかんばしくなかつたといわれ、漱石自身は、「虞美人草について世評はきかず。みんなが六づかしいと云ふ。凡てわからんものどもはだまつてゐれば好いと思ふ。(中略) 沉いひんや漱石先生に如何程の自信あるかを知らずして妄みだりに褒ほ貶へん上下して先生の心を動かさんとするをや。君の前だが先生はしかく安価なる先生ならず。しかく安価なる作物を作りつつあらざるなりか。」(小宮豊隆へ明治四〇年八月三日)とか「世の中の奴は常識のない奴ばかり揃つてゐる。(中略) さうして分りもしないのが虞美人草の批評なんかしやがる。虞美人草はそんな凡人のために書いてるんぢやない。博士以上の人物即ち吾党の士の為めに書いてゐるんだ。なあ君。さうぢやないか。」(小宮豊隆へ 明治四〇年八月六日)

このほか鈴木三重吉への手紙に「中学世界での評なんかはどうでもよし。知人を雇ふて、方々の雑誌に称賛の端書を送つたらよからうと思ふ。」といつてゐるが、これは漱石自身のことかどうかはわからない。

漱石は大見得を切つてゐるのだが、それは本当は彼が世評に対して無関心であり得ずに、逆に神経をとがらせたことを裏書きするものでは、なかつたらうか。漱石は朝日新聞入社第一作としてこの連載小説を執筆するに當つて、「大学の先生が教職をなげうつて書く小説」への読者の好奇心と事大主義とをあらかじめ計算に入れていたとしても、なおその上にアグラをかくわけには到底ゆかず、読者にアピールするためには、その構想を立てるにあつて大衆性をもたせることの必要に気がついてゐなかつた筈はあるまい。

ところが彼の好みのメレディスは、その intellectualism 癖に至つては漱石以上であり、前述の『ダイアナ』の終りにみたように、その構成法は極めて拙劣を免れない。これをお手本にしては大衆受けしないことぐらい、漱石にわからないことはなかつたらう。彼は、そのために『虞美人草』の構想をサッカーから借りることにしたのでないか。そしてサッカーの『ヘンリー・エズモンド』は、もともと、作者が全篇完結の後に初めて発表したものであつて、構造の統一という点では極めて出色であり、まさに大衆小説の傑作の名に値するものである。そこには、メレディスの諷刺や嘲罵に代つて、忠実な観察と、人物に対する温かい同情と共鳴とがある。それなのに漱石は『エズモンド』の構想を採りながらも、手法や精神においては、所詮おのれの好みと傾向から離脱することが出来なかつたらしい。結局、「文学の核としての哲学が初めからできあがつてゐて、これが論理として生成するところがなかつた」(瀬沼茂樹「夏目漱石」)のであり、例の「セオリー」に物語意識の衣を着せたちぐはぐな作品ができ上り、思想小

説を意図としながらメロドラマ的に終ってしまう失敗を招いたのである。作者としては、大衆小説の『エズモンド』よりも、intellectualなメレディスの方が、はるかにその意識にあったといふべきであろうか。

(昭和四年五月一日 受理)